

〈資料紹介〉翻刻『潤色江戸紫』(下)

翻刻の会

- 一、底本には関西大学図書館の七行九十九丁本を用いた。
 - 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 暈字は、平仮名は「ヽ」、片仮名は「ヾ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
 - 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

芦野陽子、浦野洋紀、太田楓実、釜丸祥、小林芙美、酒瀬川なおみ、柴田紘孝、中村梨恵子、西有幸、日當真心、布施あかり、水田千尋、横山知尋、吉村仁志。
- 節付、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

(山田和人)

備考

本書は『世話浄瑠璃大全』(精華書院、一九〇七)に所収されているが、翻字の誤りを修正し、節付も補い、改めて底本に忠実な翻刻本文を提供できるようにしたことを断っておきたい。

源次兵衛が詮義を致す。立帰つてお待なされて下されい。ホ、平太は帰つて待もせふが。纒蠟燭。(50ウ) 一挺の間に詮義なされて。若又松竹梅の有所しれざる時には。ハテ盗マぬといふ御主人への申訳。躬に切腹させますと。立派にいへど目は涙。ハ、ハ、ハ、こりやさつぱりとした御思案。それ迄平太が預り帰る此ニタ品。嫁のお雛が人を殺した証拠の小袖。詮義の手詰メの此挑灯。蠟燭がたち切ル迄に。一軸の詮義が済ムか。吉三が切腹お仕やるか。二つに一つの御左右を必待申すと。主のけんいち一走に。座敷をけたて、稲垣平太。家来もしどろに立帰れば。

嫁に取付キ源次兵衛。コリヤお雛。吉三が難義を救んと。命を捨る。おことが深切悦ぶぞや。イエ申親仁様。お雛の志をかんじ。平太殿にはいはざれ共。今の小袖の血は。(51オ) ヲ、サ其義はよく知つて居る。身共を迎に來りし。角介が腕の生疵。何ゆへと尋たれば。夜前お雛が供をして帰る時。脇指が鞘走てといひしゆへ。嫁が上着に付たる血りは。扱こそとがんづきながら。今のごとくゆつて平太をかへしたは。深き子細有ての事。先刻湯屋の伝七が申スには。日本堤の樋守与五藏といふ者。彼ノ一軸の詮義の手筋を。注進せふとの内意なれば。身は衣紋坂へ立越エ。様子を聞届て帰る程に。其間に吉三郎は。お雛と祝言の盃せよ。ハア畏つたと申たいが。纒蠟燭一挺にせまつた私が命。盃しても詮なき事。サアそこを思ふて。媒の平太へは沙汰なし。かゝる期に望シでも。御主人よりお指図の縁組なれば。(51ウ) 捨置カぬが忠義の一つ。あの二階の燭台に立テ置し蠟燭も。此挑灯の蠟燭も。同じ会津の巻掛なれど。明りを立るか名を流すか。思へは。はかない身の上と涙紛ず咳払ひ。お雛吉三も諸共にしはし詞も泣居しが。其与五藏と申者には。昨晚日本堤にて近付に成おいたれば。私がつい一ト走りト。立上れば勝手よりア、是々和子。其お使イには此うばが参りますと。小裙子、しく一ト腰さいて

立出ツクれは。フウ扱ツはうば。始終シヨウの様子を聞き使しイを望のぞんで出たか。ハイ。湯屋ユヤの伝つた七方しちほう迄まで参まつて。与よ五藏ごそうとやらを同道どうだうして帰かへりませふ。ホ、でかしたく。吉三きちさんが為ためには乳房ちちぶさの母ははくるしうない。源次げんじ兵衛べゑが妻つまじやといへ。さすれば与よ五藏ごそうが。かゝるくしき使しイとは思おぼふ(52才) まい。五松ごそう家の御紋ごもん付つき此挑灯こゝちてんを持もつて行いケ。其その蠟燭ろうそくも。平太へいたが持もつて帰かへりし挑灯ちてんも。二階にがいの燭台ろうだいの蠟燭ろうそくも。皆みな吉三きちさん郎らうが命いのちの縮ちぢまる火時計ひどけいと心得こころえ。必かならず油断あぶらだんすな急いそげく。合点がてんでござります。コレ和子わこ。わしが戻る迄まで早はやまつて下くださんなど。養やしなひ君きみの一生いっせい懸命けんめい。心こゝろの弓張ゆみはりり挑灯ちてんに道みちを照てらさせかけ出だせは。

詮方せんかた泣なく々く嫁よめのお雛ひな。サア申まを吉三きちさん様さま。二階にがいの仏間ぶつまへ。早はやとくくと。いふも諾いらいへもくもり声こゑ。二人ふたりは亭ちんへ。父ははは障子しやうじを。さしよせ。くハルて。諸天善神しよてんぜんじん。躬みづかが難義なんぎを救すくはせ給たまへ。御威光増益ごいこうぞうやく。南無妙法蓮華經なむめうぼうれんげきやう。ほうれんげ経ほうれんげきやう。なむ妙法めうぼうれんげ経れんげきやう南無なむ。

妙めう。法蓮華經ほうれんげきやう。祖師そし日蓮大菩薩にちにれん。度々ど、どの御難ごなんにあはせ給たまふも。此御こゝ経きやうを。普あまねく世界いっせいたんの一闍提いつたんだい(52ウ)に。弘ひろん為ための。御ご方便ほうべん也なりなむ妙めう。法蓮華經ほうれんげきやうりんの声こゑさへ。哀あはげに。法花ほつけの題号だいごう同音どうおんに。お七しちは下女くだめの杉すぎ諸共しよごやつす。姿すがたのこきん綿わた。裏間うらま口くちにた、ずめは。それと聞きしる吉三きちさん郎らう。二階にがいの障子しやうじ押おひらき。マアお七しちかお杉すぎかと。物ものいひたげに見みれば見みかはす顔かほと顔かほ。ちらくちらめく燭台ろうだいの光ひかりにお雛ひなが袖そで覆おほひ。ア、心こゝろなの夜よルるの嵐あらし。蠟燭ろうそくの早はやふたつのがわしや悲かなしい。風かぜのまへの灯あかりと俱ともに心の消入きえい時ときしも。歌經うたぎやうよんで姫ひめごぜの修行者しゆぎやうじや。我われカ夫つまの災難さいなんを遁にる、様さまに。お題目だいもくを唱となへと。頼たのむをせいで吉三きちさん郎らう。イヤなふお雛ひな。かゝる災わざはひは寺てらに有あル内うち。上人じゆんじん様の目めをくらまし。色いろに迷まよひし仏罰ぶつばちと思おもへは。御ご経きやうの功力くわうりきも有あルまじ。(53才) 修行者しゆぎやうじや早はやふいんで下くだされと。それと明あしていはね共とも。名残なごりは尽つきぬ暇ひま乞こへ。お七しちは悲かなしさつ、み兼みかみ。コレ申まを吉三きちさん様さま。其その災難さいなんは皆みなわしゆへ。おまへが恋こゝろしさ床とこしさに。きのふから蓑輪みのわの伯母おば様さまの所ところへ行い。それから直ただクに今爰いまこゝへくる道みちで。おうは殿だん

に逢イまして。聞ケは今シ夜御祝言も有げなし。あの燭台の蠟燭限リのお命とや。せめて此世の暇乞にお傍へ行たい顔見たいと。歎けばお雛も俱涙。サテハお七殿かいな。わたしは雛でござんす。吉三様シとこな様シはよくく深い縁なりやこそ。かゝる所へござんした。ちやつと爰へきて下さんせ。イヤ親仁様の手前が有ル。お七必おじやんな。ア、何シのいな。わたしはそこへ（53ウ）いかいでも大事ない。御祝言のお邪魔であると。どこやらぴんとはね題目。

杉は紛し鈴打ならし。妙法れんげ経。悋氣しつとは姫ごぜの習イと思し明らめて。赦し給へや南無妙。コレ杉そりや何いやる。悋氣する気はなけれ共。お寺で別してそれよりは文おこしても返事もなく。今宵の様な悲しい訳をおしらせないが恨しい。御心底也なむ妙。法蓮華経けふは。いかなる日也けり。座するにも安からぬ父の安森源次兵衛。仏壇にそなへたる花瓶の松に鶴亀取添。三方に捧出。此鶴亀を飯の島台になぞらへ。夫婦の盃さするのが身の祈禱。よき折からの修行者。

（54オ）祖師上人。龍の口の御難の段の。歌題目を頼入ル。それを千秋万歳の話と思ひ祝言の。盃早ふとす、むれば。

お七は猶もかきくもり。燭台の蠟燭限リのお命と。思へは悲しいお雛様シ。ヲ、道理お七上郎。あなたの難義を身に受けて。わしから先キへ死たいとくどき歎けば源次兵衛。ヲ、嫁。悲しうなふて何シとせふ。若も吉三郎切腹するに極まらば。是迄のうすき縁と明らめたがよいぞお七。イヤサ七面にそなへし。此御酒徳利が長柄の銚子。お雛。洗米の土器に。一つ受けて吉三へさしやと。父が銚子を取上れば。嫁は泣々土器に涙た、ゆる憂思ひ。外には二人が歌経のふしもしどろに。妙法蓮華（54ウ）経。祖師上人を龍の口に引出し。やがて太刀取後に廻り。御首討んと振上る。アレあれを聞ケ。日蓮上人さへも。時の災難は遁し給はず。イエそれは応身権化の沙汰。鶴が岡の神力によつて助かり給へ共。今吉三郎が身の云訳は。腹

きらねはた、ぬく。何^ニとしたかうばは遅^{おそ}し。あれ蠟燭も半^な過^かぎ。杉もお七も氣^きをあせり。ア、是^{こゝ}吉三様短氣^{たんき}な事なさんな。アレく向ふへおうば殿の挑灯^{てんとう}が。ヲ、実もく。必^{かならず}勤^{つと}早^{はや}まるなど。夕^{ゆふ}關^{かみ}照^{てら}す弓張挑灯^{ゆみはりてんとう}ひつさげてかけ戻れば。ヤアくうば。帰りしか。なぜ与五藏を同道せぬ。サア折あしく他^た行^{ぎやう}いたして。エ、残念や宿におらぬか。ハアはつと計に皆々力をお乳^{ちち}の人。息^{いき}(55才)切^きれすれは用水の桶^{おけ}にすがつて掬^{すく}ひ吞^{のみ}。是^{こゝ}迄^{まで}也と源次兵衛が胸^{むね}に。元^{もと}來^{より}覚悟^{かくご}の吉三郎。脇指^{わきさし}ぬく手に嫁^うは取付^{とりつけ}待^{まち}しやんせ。まだ蠟燭はさへぬく。コレ和子早まるまいぞ。かゝる様子を云置^いて戻つたれば。与五藏が追付見^{おしつけ}へる。かんまいてお雛様^{ひなさま}。其手^{そのて}を放^{はな}して下^{くだ}さんすなとお七も杉も叫^{こゝろ}び泣^な。イヤく放^{はな}せ。イヤ放^{はな}さぬと二階に二人^{ふたり}が争^{あそ}ふ半^な。ヲ、イおいと大^{おほ}だらばつ込^こ。身^み軽^{かろ}にかける榎守^{えのり}与五藏。挑灯^{てんとう}の御紋^{ごもん}を目^め当^{あた}りに追^おかけましたが。只今衣紋坂^{いもんざか}へお出^いなされし。源次兵衛様の奥様^{おくさま}はこなたか。ヲ、与五藏殿か待^{まち}て居^ゐたと。顔^{かほ}見^み合^あて互^{たがひ}に恠^{いら}り。ヒヤアうぬは身が女房^{にようぼう}お(55ウ)きそではないか。こな様^{さま}は京^{きやう}で別^{わか}れたこちの人。ヲ、夫^{つま}共^{ども}しらず。源次兵衛殿の奥様^{おくさま}呼^より。不義^{ふぎ}の天罰^{てんばつ}思^{おも}ひしれと。すはと抜^ひいて切^きかくる。かいくつてコレ待^{まち}つしやれ。不義^{ふぎ}でない様子が有^あると。用水^{うすい}手^て桶^{おけ}ではつしと受^うれは。又^{また}振^ふ上^りる短氣^{たんき}の拔身^{はき}あしらひ兼^{かみ}て見^みへければ。コリやく^{こりやく}与五藏。此源次兵衛が女房^{にようぼう}と偽^{いつはり}り。名代^{なしろ}に遣^{つか}したは。其方^{そのかた}を重^{おも}んじたる身^みが計^{はか}らひ。シテ又^{また}女^にめが爰^{こゝ}にけつかる子細^{こさい}はな。ヲ、わしや吉三様^{きちさん}のうばじやはいの。奉公^{ほうこう}に來^きた京^{きやう}での訳^{わけ}を。知^しラそふにも有家^{いけ}はしれず。認^{した}置^めいた此文^{このぶん}読^よんで。疑^{うたが}いはらして下^{くだ}されと。さし出^だせは封^{ふう}おし切^きり。よむ間^まもせつなき人^{ひと}々の胸^{むね}は早鐘^{はやかね}つき詰^つめし。吉三^{きちさん}が思^{おも}ひ(56才)ぞせつなけれ。コレこちの人。女^め夫^{をと}の中^{ちゆう}に設^また^けた子^こは。息才^{いきさい}で居^ゐるかいなと。氣^きのせく儘^{まま}にさし寄^よスる。蠟^{ろう}の火^ひ飛^とんで挑灯^{てんとう}の。焼^やけるを是^{こゝ}ともみ消^けはずみ。披^{ひら}し文^{ぶん}も炎^{えん}くと。もへたつ跡^{あと}はまつく

らがり。吉三郎心をいらち。ヤアくく五蔵。松竹梅の一軸詮義の手が、り。胡乱な義なれば切腹とげるが何んどく。ア、暫くお待なさい。仮初ならぬ一大事。それへ参つて申上ふ。女房疑いはれた。案内しろと打つれて。入くる内も善悪の様子聞ク問そやるせなき。

樋守与五蔵しづくくと打通り。拙者只今。衣紋坂の伝七が方へ参り。女房こそが中置キ様子に聞ケば。日本堤に小柄を落しおかれし（56ウ）ゆへ。吉三郎殿の御難義とや。何をか隠さふ其人殺しは此与五蔵。早く寄つて繩かけられいと押直れば。是はと皆々驚く中にも源次兵衛。イヤ人殺しの詮義は二段。先ッ松竹梅の一軸の詮義どうじや聞たい。ホ、お心のせくは尤なれと。存念ござれば其事も。繩かゝらねば申さぬと。いふにぜひなく吉三郎。下緒をたぐつて与五蔵取つたと即座の早繩かゝりつながるうばが歎き。お七も杉も裏門に聞耳立る計り也。

与五蔵憶せず。コリヤ女房ほへず共。おれが懐の紙入に有ル書状。御親子のお目にかけいと。取出さすれば吉三が引取。何々御頼によつて。五松家より御懇望の松（57オ）竹梅の一軸。盗取り其元へ遣し候所に。いまだ御褒美の沙汰是なきゆへ。御催促申候。ムウ肝心の名書キの所を引さいたれ共。此手には見知り有ル。吉祥院の同宿快典が手跡。ホ、よくもお見知りなされた。昨晩ほうびの金。貰に行くとなぬかしたゆへ。非道な事とは存ながら待伏して。分ケまへおこせと懐中へ手をつ、込ミ。思はずばい取たる其手紙。宿へ帰り披き見て。御詮義の種に成べき物と心付。早速伝七を頼み御注進申たは。御厚恩に預りし五松様への御奉公。又身の科を我と我。名乗って出しは娘が為と。いふに女房不審顔。ナフ娘とは誰カ事。ソ、そこに居るお雛は。二人りが中に設（57ウ）た子じやはやい。ヤアくく。そりやはんかいの。ヲ、サ京で夫婦が

別レ々に流^ろ芳^{ほう}の砌^{せき}り。水^{みづ}子^この養^{やう}育^{いく}成^{せい}がたく。早^{はや}咲^さの梅^{うめ}を添^そ。北^{きた}野^の七^{しち}本^{ほん}松^{しょう}の辺^{へん}へ捨^す置^ちキ。五^ご松^{しょう}家^けへ拾^{ひら}れ。雛^{ひな}鶴^{つる}と名^なを付^つケ。お
育^{そだ}なされて下^{くだ}さると聞^きしより。お家^{うち}長^{ちやう}久^く娘^{むすめ}息^い才^{さい}延^{えん}命^{めい}と。十^{じゅう}六^{ろく}年^{ねん}が其^{その}間^まいのらぬ日^ひとてはなかりしぞや。ア、いかにも。わ
たしが身に覚^{しる}の有^あル捨^す子^この咄^{はな}。扱^あはおまへがと、様^{さま}か。そんなりやお雛^{ひな}様^{さま}はわしが娘^{むすめ}か。か、様^{さま}のふとすがり寄^より。名^な乗^り
合^あたる嬉^{うれ}しさより繩^{なわ}目^めを悲^{かな}しむ妻^{つま}と子^こが涙^{なみだ}にしんみを躪^あせり。ヤア両^{りやう}人^{にん}共^{ども}に何^{なに}が悲^{かな}しひ。御^ご両^{りやう}所^{じよ}の手^て前^{まへ}も面^{めん}目^めないが。拙^{せつ}
者^{しや}めも京^{きやう}都^とに罷^か有^うし時^{とき}は。岩^{いわ}木^き藤^{ふじ}左^さ衛^ゑ門^{もん}（58才）といふ。三^{さん}石^{ごく}三^{ざん}の侍^{ざむらい}伊^い成^{せい}ツしが。色^{いろ}ゆへに樋^ひ守^{もり}に迄^{いた}落^おぶれ。憂^{うれ}年^{ねん}月^{げつ}を送^{おく}る
所^{ところ}に。此^こ間^ま衣^い紋^{もん}坂^{さか}の薬^{くすり}湯^ゆにて。源^{げん}次^じ兵^{へい}衛^ゑ殿^{でん}の嫁^{よめ}は元^{もと}ト。五^ご松^{しょう}家^けのお妣^{おしと}。雛^{ひな}鶴^{つる}と聞^きしを証^{しやう}扱^ごに我^{わが}娘^{むすめ}と知^しり。それゆへに身^み
の科^かを打^う明^{めい}ケて。繩^{なわ}か、りしは吉^{きち}三^{ざん}殿^{でん}の為^{ため}。あのお雛^{ひな}めが不^ふ便^{べん}さゆへでござります。早^{はや}く代^{だい}官^{くわん}所^{じよ}へ引^ひ渡^わし。智^ち吉^{きち}三^{ざん}郎^{らう}に科^かな
き次^じ第^{だい}を申^{まを}披^ひて下^{くだ}されよと。健^{けん}氣^きにいへは源^{げん}次^じ兵^{へい}衛^ゑ。親^{おや}子^こはいとと哀^{あは}れ増^まり涙^{なみだ}よそ目に紛^ませば。お雛^{ひな}は吉^{きち}三^{ざん}か指^{さし}添^{ぞへ}を抜^ぬ手^て
も早^{はや}く。咽^{のど}へぐつと突^つ立^たる。四^し人^{にん}あはて、コハそもいかに何^{なに}ゆへへのじがいぞと。いふ声^{こゑ}洩^もて外^{そと}面^{めん}より。ナフ申^{まを}お雛^{ひな}様^{さま}。
早^{はや}まつた（58ウ）事^{こと}遊^{あそ}したと歎^{なげ}けは手^て負^おは。介^{かい}抱^うする人^{ひと}を力^{ちから}に高^{かう}欄^{らん}に延^のび上^あり。コレナアお七^{しち}上^{じやう}郎^{らう}。わしやと、様^{さま}の為^{ため}に自^{みづか}
害^{がい}はずれど。名^な残^{ざん}惜^{しやく}ひは吉^{きち}三^{ざん}様^{さま}の事^{こと}。こな様^{さま}を頼^{たの}みます。今^{いま}迄^{まで}より猶^{なほ}大^{たい}切^{せつ}に。いとしばがつて添^そて下^{くだ}さんせ。思^{おも}へはく
わたし程^{ほど}果^は報^{ほう}拙^{せつ}い者^{もの}はない。お主^{しゅ}様^{さま}のおさしづにて。器^き量^{りやう}のよい殿^{でん}御^ごを持^もつと悦^{よろこ}し。かいかもなく。たつた今^{いま}祝^{しう}言^{げん}して。
直^{ちやう}クに別^{わか}る、悲^{かな}しさ。思^{おも}ひやつて下^{くだ}さんせか、様^{さま}とすがり付^つてむせび泣^なキ。勿^な体^{たい}なや此^{こゝ}春^{はる}から。おうばくと朝^あ夕^{せき}付^つ添^{ぞへ}い有^あ
ながら。おまへを産^うむの母^{はは}様^{さま}としらなんだ。ふしぎに今^{いま}夜^よと、様^{さま}に廻^{まわ}り合^あつたりやあの繩^{なわ}目^め。智^ちの為^{ため}に代^{だい}官^{くわん}所^{じよ}へ引^ひれて（59
オ）行^いふといはしやんすを。何^{なに}と見^みて居^ゐられふぞ。親^{おや}に先^まだつ不^ふ孝^{こう}を赦^{ゆる}して給^{たま}はれと。両^{りやう}手^てを合^あせニタ親^{おや}を。ふし

おが 拝みく。深手の上ウに気をもみ歎ウけは父母わつとむせび入。藁わらの上より人手ウに育そたち。恩ウも情もかけぬ親ウに。孝行かうくたて、の自害ウとはうきめを見よといふ事かと。前後ぜんご正体ただい泣叫なきけび。胸ウの堤つみも張はりさく計。こぼす涙あきんは荒川アキラの樋フシノルの口。ぬきしごとく也。

地色中 歎ウきの隙ひらより吉三郎。立寄ハル見れば必死ひつしの深手。責せめては親の命を助け未来の迷ウひはらさせんと。与五蔵いましめが禁いましめを引ひほどき。云調号のお雛ウが為ハルに父なれば。我ハル為ハルには正ハルしき舅。ア、是々。其お志は嬉ハルしけれ共。拙者せつが命助めいすけられ（59ウ）ては。イヤ快典かいてんを手にかけしゆへ。お雛ウが自害じがい致せしたれば。其元かまには構かまなしと。いふに引取ひきとル源次兵衛げんじべい。ヲ、いかにも。先程せんじやう平太へいたが持もち帰りし。嫁よめが小袖こさそでを証あかし憑たにして云ハルいひらかば。与五蔵いましめの身みにも別条べつじやうなく。盼せつにも切腹せつぷくさせずに事を済すす気遣きぢひすな。エ、イそれはどうしてく。悲地ハルしき中ちゆうにも人々ウ一同いっとうに生いき出でる心地こころ。詞ことばホウふしんは尤なほ。名書なしょキの所ところは破やれたれ共。快典かいてんが自筆じひつの手紙てがみ。是を証あかし憑たに源次兵衛げんじべいが引受ひきうけて。一軸いっしやくの詮義せんぎをしぬかば。平太へいたがぐつ共いふ筋すぢなし。扱あつか吉三郎きちざうは寺てらへ帰り。御主人ごしゆじんより給たまはりし。嫁よめが菩提ぼだいを弔とむらふが。お上かみへ対たいしてせめてもの申まを訳やく。夫婦ふうふの衆しゆう。手負ておほの介抱かいほう頼入らいにゅうルと云ハル捨てかけ（60オ）出でる。ナフお待まちなされ親仁しんにん様さまと。ついで吉三きちざうが追おかくれば。何事なにことやらんと誰たれ々たれも心こころを付つくる表おもての門外もんがい。源次兵衛げんじべい立たとまり。コリヤやい盼せつ。あの燭台しゆくたいの火ひが消きると。平太へいたが爰こゝへ来るは必定ひつじやう。こつちから先まづを取とつてばしかけ。そちが身みの云い訳やくたつる爰こゝ放はなせと。ふり切きく走はし行し。お雛ハルはいまはの。目めをひらき。ア、有難ありがたや舅御うぢごのお情じやうで。とつ様の命助めいすけからしやんと聞きいて死しれば。思おもひ置おく事ことは何なににもなけれど。名残なごりに最も一いつ目め。吉三きちざう様さまお七ななさん。未来みらいのみやげにお二人ふたりリのお顔かほが見みたいと声こゑふるはし。絶入息たつあいきの下したよりもくとき願ねがへは。詞ことばヲ、今迄いままで難面なんめん此吉三こゝろきちざうを。臨終りんじゆうの際とき迄まで其様そのさまに恋こひしたやる。心根こころねがいぢらしい。イ、エイナ（60ウ）此お七こゝろななを。恋こひの仇あだとて恨うらみもせずおウいとしの身みの果はてやと。見上みあへ見みおろし三人さんにんが。顔かほつくくと打守うちまもり一度いちどにわ

つと歎くにぞ。母も見る目にたへ兼て。なまなかに親と子が廻り合ずば此様な。はかない死はせまい物。いかなる前世の報か業か浅ましやと悔めは父も。身をなげふし。死べき我れは助りし娘への恩がへしと。涙の粒曲警際よりふつ、ときれば。女房も俱に筭曲。切ッて払ひし此世の細。妙法授戒の輩は。女人も成仏疑イなき。御みやうはん也なむ妙。法蓮華經。皆一同に合掌の。十のれんげや九つの花の台に法の道。

コレなふ今娘が息を引(61才)取ルと。歎くは恩愛親子の道。闇路を照す燭台の火影と俱に消て行。雖は冥途へ趣く道お七吉三が帰るさの。道を替るは先きだつ人に義理を立たる情の道。色も無常も一如ぞと。悟れは菩提の道しるへ名残りは。尽ぬ恋衣袂を。しぼりて別しける

四之卷

神と君との道広く世は動なき江戸の町。磨の目形に建続恵に榮る時成ルかな。天和元年師走の空世間の節迫かけ構ず。昌平橋筋のさくと。万屋武兵衛油屋の太左衛門。連立来る向ふより。剃下奴が息を切ッて申々御兩人。あんまり(61ウ)遅さに迎に参た。ホ、平太様のお待兼は御尤。イヤサ旦那はとつくより木挽町の芝居へお出。それに付。コレかうくとさ、やけはナントいはる、。吉祥院の上人が吉三郎をつれて。芝居見物して居る。サア早くきて吉三めに。意趣ばらしをなされいと旦那の使イ。ア、そりや忝ひおしらせ。追付それへ参ります。こなたは先キへいかつしやれ。ヲ、今中村七三が曾我の十郎で。和田酒盛の面白イ胴ぶくら。見はづしてはならないと奴は芝居へ立帰る。

太左衛門小声に成。芝居で吉三に出入しかける其仕様はどうじや。ハテ楽屋から呼出して。存分いへと有ル平太様のおさし

づと。二人がひそくしめし合せて行先中より。いきせきと八百屋久兵衛供の丁稚でうちがべらつくを。氣の(62才)せく儘ままに引
立たれは。アイタ、腕かひなが痛いたであるかれぬ。いたいくと泣出なす。

武兵衛立寄。ホイ久兵衛殿か。コレハ武兵衛殿太左殿どれへござる。イヤ見れは丁稚めがほへおるが何なにとしました。太左
あのみつちやめが頬ほを見や。悉皆しつがい分銅ぶんどうの横手じや迄と打笑へは。ナフ武兵衛殿。時分じぶんがら。利銀らいぎんの催促さいそくにても廻まわらつしやる
か。ナンノそんな事は手代共がします。おらは遊び様がないによつて。木挽町の猿若山三が顔見世狂言まわらわ。大出来できと評判ひやうばんす
るによつて見物に行います。ホ、おれも木挽町迄商売筋しやうばいすじで。イヤ商売筋ではない。聞きケは吉祥院が。けふ猿若が芝居へわ
たげな。其棧敷ざしきへ吉三郎を見舞にかしやつたの。お七を目当に三百両。遣やはする舞には(62ウ)鼻あしらひ。ふきやちる
様な小姓吉三に折見舞。ア、是々太左衛門殿。そりや何いはつしやる。金の貸借かしかりは格別かくべつ。お七は金銀で売娘じやない。端か
ら何も構かましやんな。イヤ構かまはふはいの。コリヤく太左衛門だまれやい。モウ親仁殿おんも氣をしづめて下さい。何事もお
れが貰もらますと。いふに久兵衛納得なとくして。太左殿氣にさはつたらこらへさつしやつれ。けふはこちの嘉例の餅搗。先達さきだちッて人
はやつて置おいたれど。間違ぬ様に。きて下され武兵衛殿。アイ。芝居はまが果はたら。直ただ々に宿老殿誘ようて行いませふ。扱あ吉三郎めは
親の内をしくしつて。又吉祥院へ舞戻まりてけつかるげな。ナントお七は前へ行たがりはしませぬか。ハテ其様な氣遣いきぢいさつし
やるな。ニタ親がきつと付て居る。サア今(63才)夜の餅搗はお七とおれが内祝言いざい。委細いさいの事は。お宿老しゆくろうの弥三右衛門殿
に咄はなして置おきました。ヲ、そんなら名主殿に聞ませふ。サア弥作。腕かひなが痛いたとてへたばつて居ては済すぬ。供たしてこいとせり
立たられ。ア、痛いたみます様さまにござります。あしらはしやつて下さりませ。芝居の木戸口出でしなに。ソレハくうつくしい娘が。

エうまそふなあん餅を持って行く。ちよいと一つ^{つまん}抓で仕てやつたれは寄ッてたかつて。突こかして踏おつて。腕ががつくりといふて痛みます。旦那様。何ンぞ葉が付けてほしい。エ、儻に付ふ葉りはないと。叱^{しか}れは武兵衛聞兼て。コリヤ阿房よ。爰へうせい直してやらふ。すりや芝居の木戸口で。あん餅の盗喰^{ぬすみくい}で。サア案の外なめに逢^あつたと痛腕^{いたで}をさし出せは。

太左衛門に引ッばらせ。(63ウ) 紙入^{かみいり}れより帕取出し。日影^{ひかげ}にすかし痛所に押^おあてて。それ痛^{いた}い方の手をふつて見い。ハ、アてもめんような。旦那さん。痛さがとんどこやらいた。コレくくく。踊^{おど}ろと儘^まじやと腕^{うで}を振^ふてかけ廻^{まわ}れは。

久兵衛も恠^{おどろ}りして。テモ扱もふしぎな物。どれ武兵衛殿。其帕^{そのか}ちよつと見ませふ。イヤそれから御らふし。金持といふ者は。色々の結構な物が手に入ルじや。是からお七を手に入れる稽古^{けいこ}の為。山三^{やまさん}が芝居へ行^いき。色事^{いろこと}の仕様見^まてかふと。太左衛門を引連^ひれて。木挽^{きびき}町へと別^{わか}れ行く。

久兵衛暫^{しばらく}ク小首^{こくび}を傾^{かたむ}け。武兵衛が持て居た今の帕は。慥^{たしか}柔女殿より預り置^まいた。松竹梅の御神筆の包^{かみ}で有^あた。雪の下とい^う幌。元トの色は薄紅梅^{うすべに}で有^あたが。花色^{はないろ}に染直^{ぞめ}して持^もっている(64オ)にもせよ。雪の下の地紋^{ぢもん}があれば慥^{たしか}にそれ。追^おかけて改^{あらた}め見んとかけ出しては立^たとまり。イヤく大切^{たいせつ}なる詮議筋^{せんぎすぢ}。途中で何かといはふより。内^{うち}へ帰^{かえ}つて娘お七^{むすめお七}に言^い含^こめ。色^{いろ}じかけにしてあの帕^かを。こつちへ取^とつて雪の下^{ゆきのした}か。イヤ牛^{うし}の舌^{した}ならうまからふ。ヤイだまりおれ。しやべらずと供^{とも}しおれと。子ゆへに苦^く勞^{らう}。紫竹^{むらさきたけ}の杖^{つゑ}つき詰^{つめ}。てこそへ急^{いそ}ぎける。

名^なに高^{たか}き猿若山三^{さるわかしんさん}が大芝居^{おほしばい}。見物群集^{けんぶつぐんしゆ}の其中^{そのうち}へ色^{いろ}に。ほころぶ花道^{はなみち}伝^{つた}ひ。お七はお杉引^{おすぎひ}つれて恋^こしき人の跡^{あと}をおひ。勢^{いきほひ}曾^そが我^{われ}の狂言^{きやうげん}より見た^みたさ逢^あいたさ数々^{かずかず}の。棧敷^{ざんしき}くを見廻^{みまわ}して。アレなふお杉。東側^{とうがわ}の掛棧敷^{かざんしき}に吉祥院^{きやうじやういん}の上人^{じやうじん}様。其傍^{そば}に吉三^{きちさん}様

が居さんすはいの。トレ〜。ほんにと手をたゝき。まねけど（64ウ）しんき気がつかぬ。いつそあそこへ行ふじやないか。皆様御免成ませと二人は棧敷へ急ぎ行。

上人見給ひ。コレハお七。最前は親久兵衛殿わせられたに。かさね〜の見舞添い。愚僧もけふは年忘れにきたれ共。はり芝居で棧敷の思はしき所がなふて。窮屈には有ふが。是へ〜と挨拶あれ共うはの空。サアおまへ方のお出の様子をと、様の咄。武兵衛や太左衛門も芝居へ行かれたれは。もし吉三様と喧嘩などがありやせまいかと。聞いてわたしが氣遣ひさ。いひたい事もお顔見たりや嬉しうて。何にもいはれぬなふ杉と。いへは吉三は師匠の手前。恥らふ顔は毛氈の。塵を捻て詞なし。

上人声をひそめ給ひ。コレ〜兩人。武兵衛や太左衛門は此向ふの（65オ）棧敷に居る。たつた今迄大酒。吞草臥てぞんざい千萬な。棧敷に寝たそふな。アレ〜供の奴が扇で野ぶろあおいで居る。見付られぬ様にしやと。衣の袖を覆ひ給へは。はつと二人が胸はまく〜。幕の内より。東西〜。吉祥院のお小姓吉三郎様急用。楽屋迄お出なされませ。急用〜と呼立る。マア呼出しは氣遣し。早ふ〜と師匠の仰に。吉三は立て入にける。

跡にお七は夫こふ雉子。峙に残る其風情。向ふの棧敷に三人が。呼出しの声に目を覚し。サア平太様武兵衛。今吉三郎を楽屋から呼出した。棧敷には蛸坊主が残つて居ると。聞より武兵衛。見繕ひして楽屋へ行クを平太押とめ。コレサ武兵。役者共が居る所へむさと踏込。（65ウ）狂言の始まる前に騒しては後日の誤り。吉三郎計りに鬱憤をいふたがよいナ。太左衛門合点か。其方もお来やれと。三人打つれ楽屋をさして入にける。

あなた地ウの棧敷色は見色ずしらず詞。エ、わごりよ達キの来キよふか遅キかつた。たつた今和田酒盛キの段の幕キが詰キつた。何が虎御前色を相手地ウにして。九十三騎キが酒宴シムエンの最中キへ。曾我キの十郎キが見キへたれば。敵工藤キが無理酒キ。難義キな所を虎キが発明キなる働キき。中山キ小夜キ之介キといふて。丁キどお七キそなたの様な女形キで有キつたはいのと。咄キの半引幕キ。真中キしほらせ口キ上キいひ罷出キ。今朝キ程キより長キカ事御機嫌能キ。御見物下キされます段。座中何程キか大慶キに存奉キります。別キして此所キは。座本キ猿キ（66才）若山キ三。矢の根曾我キの段左様に御覧下キされませふ。つキいとはいりしだんキなら幕キ。さらキくキと引明キれば。淨瑠璃キ太夫大薩摩キ。三味線引キつれ見台キに押直キれは。御当地キ最負キの猿若山キ三。曾我キの五郎キが矢の根の段。江戸塗キの真赤キ頬キいさまキしかりけるキへ次第キ也キ去程キに。曾我キの五郎時宗キは。力申キの願上キり。兄方キに向つて太祝キ。それ。父の仇キには俱キに天筆キ和合楽キ。地福キ皆円キまんぐはんの。軍書キの窓キの北面キに雪キを。明キりの浅みキどり。瘦我キをはらぬ曾我キの流キ。伝キへ聞養由キ。鎬キは遠キきこま唐土キ。ちかく和朝キを尋キれは。源三位キ頼政キ。兵庫頭キたりし時。鶴キといつし化鳥キに。矢取キつて打キつがひ。（66ウ）南無キや八幡大菩薩キと。心中キに祈念キして。よつキぴきひやうど放キつ矢キに。手キこたへしてはたと中キ。誉キは雲井キに。鳴渡キる。古今無双キの弓勢キに。勝キりはする共キおとらじとちから。自慢キの花キの春。世間キ構キぬ素浪人キ。脚キから干蛇キも串貝キも。取ルキにとられぬ酒屋キの通キ。十七貫八百六十四文。横キにねの日も初寅キも。喰合キのなき福神達キ。どふで貧乏キするからは。自問自答キの悪たいで申キてもふさく。先キツ。大黒キは慮外キ者キ。とはどふだ。ハアテ不断頭巾キを脱キぬはさ。ゑびすは身持キがうそぎたない。とはどふだ。鯛キをおだきの脍キ。精進日キには付合キれぬ。毘沙門キの甲頭巾キ用キ過キてうつキとしい。弁才天キは舟キナまんちう。浪乘キ

舟の（67オ）うら、かにとろくへねむり時宗はした、か過たる雜煮腹。食後の一ぶく千金シと有ルに任する安たばこ。鼻のさきなる春霞打ながめつ、居たりしか。ヤアラふしぎや。けしからぬ胸さはぎ。察する所兄柘成。大磯の廓にて。敵工藤に出っくはし。難義に及びおはするか。いで。某がかけ付ケて。たとは、祐経節会汁の鯨の威勢をふるふ共。我レ鱸の飾海老。赤いは爺が譲の血気みぢんになさでおくべきかと。力足を踏しめく。傍に繫し驪たすきはづして。太腹しつかと即座の鏡。

あらひ轡に繩手綱。大の鎗矢千里の鞭。直クにうては五十町。廻れは三里三がの庄。宇佐美久津美河津か粉。曾我（67ウ）の五郎時宗が。曲馬の程を是見よと大磯。さし。てへ入口切幕といやどや。やれ喧嘩よと立さはぐ。

舞台の見物押のけ突のけ。引立られて吉三郎。形も髪もさんばら鬢。ヤイく武兵衛太左衛門。何ゆへの狼藉。ヤアぬかすな。儕はおれか恋の敵と。平太も傍から腰押で。コリヤ覗な。役者の知った事じやないと。吉三二人をおつ取まいてさいなめは。こらへ兼てするりとぬき。切てかゝる刀をもぎ取引立ッれば。是なふ暫しととむるにかいなき。女心の危さこはさ物思。ひ寝こそへあやしけれ。

お七は火燵に仮寝の夢何とやら魔れて。ふつと起キて。コレなふ申吉三様。くとかけ廻りく。傍を見るより。エ、イ。扱は今のは夢で（68オ）有たか。ハア。はつと計りにかつばとふし消入ル。ごとくむせび泣ク。声に驚き何事成ぞと母はかけ出。ヤア何ぞこはい夢でも見やつたかと。せな撫さすり氣を付くれは。

お七は偏体冷汗に。しほる袂を顔にあて。ナフか、様。けふ吉祥院の上人様。年忘れに吉三郎様を連レまして。芝居見物に

お出なされしと弥作が咄。どうぞわたしも行きたいと。思ひこがる、火燵こたゑの仮寝ゑたね。杉と連立芝居へいて。恋しき人にヲ、
氣疎けうと。吉三殿に逢あつた夢見たのが何なにで悲しい。サイナ。向ふの棧敷さじきより万屋の武兵衛。油屋の太左衛門が見咎とがめて。吉三様
一人りを大勢寄てうぢやくてのぶち打擲うちやく。夢ゆめと思へど氣きに(68ウ)かゝる。悲かなしいはいなと託かこつにぞ。エ、明暮あけくれ恋し床とこしと思やる心か
ら。あられもない夢を見る。杉を相手に此紅裏こまろ。湯熨ゆのししやと云いつて置おいたのに。こゝら内に引ひちらして。どこへいて居る事
ぞ。お杉のちん。くくとにへかへる。湯熨ウの釜かまの火をおこして携たづさへ出い。申こかみ様。お叱しかりなさつて下さくだすな。湯がさめたによつ
て。あの大和ぶろに火をおこさふと思ふて。サアそなたが台所だいどころへいきやつた間まに。お七は夢に芝居へ行き。吉三殿と武兵
衛殿。喧嘩けんかはさつしやつたを見たといの。ヲ、もしもほんの事なら。お七様ななさまの悲かなしから。誰たれぞ見みせにやりたいが夜通し
のあも搗うで。皆みなの衆しゆは草臥くたびれ。弥作殿やさくでも(69オ)つい一ト走はりと。立たツを母ははが押おとめて。アノ弥作は新參しんさん者もので。方角ほうかくさへろ
くくくに覚ぬ阿房あへ。殊ことにけふは此新宅しんたくの。振舞ふるまひやら餅搗もちつきやら。お宿老しゆくらう様がござる筈はず。それに付つきお七には。親仁殿おんじんの云聞いひきか
て置おつ事が有あるといいの。涙拭なみぬぐふて奥おくへいきや。早はやふくくとす、めやり。おれは勝手かちてで善哉ぜんざいの拵こしらへさせふ。杉は其間そのまにゆのし
物もの。きりくくと仕廻まわつてたもと。心こゝろせかる、日暮まへ前まへ。表うらへおとなふ三人連さんにんレ。つかくくと入いりければ。コレハくくお宿老しゆくらう様。
武兵衛様げんぱく玄伯げんぱく様。よふこそお出と杉ハルが挨拶あいさつ。久兵衛出向ひさべゑでうむひ。ホ、名主なぬしの弥三右衛門やみさゑもん様。いつもの嘉例かれいをはづさずいづれもを
連立れんたつす。事おほひ時分ときぶんに。(69ウ)よふござつて下くだされた。イヤ是親仁殿おんじん。此弥三右衛門やみさゑもんは何年なにねんか爰こゝの餅搗もちつきに。ついに汁
粉こを喰くいはづした事はなけれど。過あやし類火るいゑに丸焼やけにあはれたれば。ことしはよもやと思ふたに。此こ様に普請ふしんも出来きて。見世
を見れば。橙だいご 櫟ゆづりは ほんだはら。蓬菜ほうらいを見る様ような。コレ名主殿なぬし。正月詞取置しょうげしとけおいて。此武兵衛たけべゑが頼たのんで置おいた事をいふて下くだされ。

ヲツトそれはかんでん致した。おれが平椎茸ひらしいたけにいひさへすれば。爰のの親仁は呑こんぶ。ナフ玄伯老そふじやないか。ヲ、そふ共ども。近年できの出来分限者ぶんげんしやを智ちに取ル事。何なにの久兵衛殿がいやでござらふ。デモいやな証拠しやうこには。お七が（70才）嫌きらへは二タ親共おやぢどもにぐるに成なつて。けふよ明日あす日よと嫁入よめいれを延のびさるゝが業腹ごうはら。悪性あくせいな娘とは知ながら。ほれたが因果。ア、是々武兵衛殿。お七が悪性あくせいしたとは何を見付て。ハテ潔白けつぱくそふにいはいれな。此春寺このはるでらで小性吉三とお七が中の。起請きせうを見せたを忘わすてか。イヤ其起請きせうの相手あひまは湯島三吉ゆしまといふて。こなたと云号うしなせぬ先キの事。ア、是それもとつくりと詮義せんぎしたれば。其三吉さんきちめは爰ののお杉のすぎが忍男しのびじやげな。とにも角かくにも吉三きちさんめは。おらが恋の敵てきだによつて。けふも芝居しばいで踏ふんだり蹴けたり。小気味こけいのよいめに合せたと。いへはお杉のすぎが恟しやうりし。ソレハマあほんかい（70ウ）な。其喧嘩けんかをお七様お七さまの夢ゆめに。ヤア何なにといふ夢ゆめを見た。イ、エイナ。お七様お七さまはそんな事を夢ゆめにもしらず。此武兵衛様このぶへいさまはなぜ遅おそと。待兼まちかねてござんしたと云紛いひまじらせは。ナニぬかずぞい。お七お七がおれを何なにの待まちふ。イヤ杉すぎけふも芝居しばいで太左衛門たざゑもんやおれに。われが事をくりかへしく。問とて、有あたぞよ。ムウそりや誰たれがへ。ハテとほけない。京都五松きやうとの御家老平ごけらうへい太様さま。お宿本しゆくほんト迄いた太左たざが送おくつていたれば。てつきりと戻かへりには。三島みしま曆れき見る様さまな。文ぶんがこふ待まちて居ゐいと。なぶれば名主なぬしがせいつかし。エ、此師走このしはすの果はたけに濡ぬぜんさく聞きケは一倍いちばい冷ひやる。餅搗もちうを兼かねて今いま夜のよの聳たか入いれ。盃さかが濟しづんだら其跡あとで。きんごひかふと思おもふて。かるたを持もつ（71才）参致さんししたと。見みずれば久兵衛ひるべゑ。コリヤお杉おすぎ。すだ町の長和殿ちやうわだんをも呼よんでこい。夜よと俱ともに離座敷はなれ敷しきでお咄はな申まさふ。皆々みな奥おくへと夕間暮ゆふまくれ。男おとこ女子むすめがいそがしげに。行燈あんどんともせは表うらの戸かど。しめやかに降夜かみよルるの雪ゆき。つもる思おもひに。安やすからぬ。むざんやな吉三郎きちざう。髪かみも形かたちも取乱とし木挽町きわきちやうより直ちやうク様さまに。恋こひしき人ひとを簀笠すしかさに。忍しのぶ姿すがたぞ哀あはなる。

杉はそれ共白雪に。ひらく傘門下の口。すれ違ふを。コレなふ是小雪上郎。くと呼かへせは。テモふしぎや。世に有し
時のわしが稚名。知って呼しやんすは誰レじやへ。ヤア吉三様シカ。こりやまあどうしたお姿と。様子とへ共さしうつむぎ。
とかふ諾も泣計。ム、聞へた。(71ウ)扱は芝居で武兵衛と喧嘩さしやんして。それから直クにお出かへ。ヤア武兵衛とお
れが喧嘩せし事誰しらした。サレハイナ。お七様シのおまへを大切ツに思はしやんす念が通じ。仮寝の夢に見て。それはき
つい氣遣ひがり。サア其真実なお七の心に引されて。喧嘩の場より師の上人様の。お目を忍んできたはいの。八丁堀のしる
べの方へ立寄て。此簀笠を貰ひ受ケ。恥もちじよくも顧ぬ。是が安森源次兵衛といふ。侍イの子の有ふ事か。諸人の見る
中で。町人づれにたゝかれて。のめくと爰へ来りしを。御存なければ上人様。撫や案じてござらしやろ。師匠の罰親の罰
當ツて(72オ)吉三が此形リと又さめくと歎くにぞ。杉も涙を押しとめ。わたしが使イにいて戻つたら。首尾してどうぞ逢
せましょ。それ迄待てござんせと。内へ伴ふ二人がそぶり。暖簾のかげよりいぢわるの。武兵衛が見る共。しらぬ危さ竹
椽の。下々に吉三を忍せて。お杉はとつかは走行。
始終を見聞ク武兵衛が一鉄。やつちやしてこい爰に有。釜な熱湯を吉三めに。椽の上からあびせふか。イヤくく。杉と
お七がつうくつの。徹蹠見付て存分シにしてこまさんとそしらぬ。顔して奥に入る。
不便やお七は夫マの吉三が来りし共。しらで思いに身をこがす。火燧にとんと打もた(72ウ)れ。泣沈たる折こそあれ。
台所より女子共。三方土器束熨斗。追々座敷へ持運へは。母は銚子に蝶々の折そへ付てせはしげに。コレなふお七。なぜ
に爰へはづして居やる。ちやつと奥へきてたもと云捨行ケは。

跡地色ウよりひよこウ前髪打ふり。丁稚てつちの弥作取肴。手に持ながら立色とまり。コレお七様嬉詞しいか。否いやの応おうのと有詞とても。親と金には肩かたはね骨が。おれもちつくりあやかりたい。吉三様の聞ハルカしやつたら胸の火ハルがもへるである。もへる序ついでにおまへ程火に縁ウの有ハルお方ハルはない。火事地ウゆへ寺いで徒いたづらし。火事ウゆへ今度の嫁ウ入し。あの脾ハルの臟ひの強つよい。武兵衛ハル様に抱だれて寝て。（73才）ひばりの様ウにならんしよと笑中て。へこそは走ワカリ入る。

お七地色ハルはわつと声を上上。ナフと、様か、様恨ウしい。わしが心にどの様な行れぬ義理ウが有ハル事やら。親子ウの中で問よれずは人伝づても聞ハルもせず。死しむといやと云放いす。事こを好このまされかた。娘一人ウリを捨ハルるのか。あんまりむごい心ウやとかつぱと転まび泣ハルければ。縁地色中の下には吉三郎ウ爰ウに有ハル事しハルらせたや。隠ハル蓑ハル隠ハル笠ハルなら抱だけ付ウて。心ウのたけをいひたいと声下も得ハル立ハルぬ忍ハルび泣ハル。母ハルは立出ハル。コレお七色。先詞きに親仁殿ハルの云聞ハルカさしやつた訳ハルあれば。武兵衛ハルの心ハルに従したがふは暫ハルシの間と思ハルふても。吉三殿ハルのお主しへ忠義立た（73才）さすは。そなたの心一つぞや。サイナイ地ハルといしい夫ハルトの為と思ハルへど。ちつとの間でも武兵衛ウへ嫁入ハルする事は。か、様ウこらへてくと託立かッちれは吉三郎中。何かは様子ウしらね共我ウカ主人ウへ忠義ウの筋ウと有ハルルからは。夫婦ハルの縁ハルも是迄ハルと。あきらむる程ハル悲ハルしさのまハルさる思ハルひぞ不便ハル也。イヤなふお七詞。若い時ハルには此母ハルも。一ハル度は花ハルをやつてきて。ほれたほれぬのすべもしり。器量きりようのよいとあハルしいのは老ハルイの目ハルにさへ見ハルゆる物ハル。そなたのが皆ハル尤ハル。いやといやるをむりにとはハルけふ迄ハルいはぬ二ハルタ親ハルを。むごいとはいハルはれまい。世詞が世の時ハルで有ハルふならたとへそなたが合ハル点ハルしても。あんな男ハルを待ハルタ（74才）さふか。器量はつり発明はつり揃はつりたる智はつりとならべて見ハルよふ為ハル。ぶんハルに過ハルきたる甘荷かの單た笥す長持ち取揃と。どこへ縁ハル付ハルきさすとも恥はしうハルない様ハルに。仕拵しとへたる襟えり数かずをハル残ハルらず類火るいにあだとなし。それから発おこて此難義し。世間詞の掟おきては嫁入ハルして。夫ハルトを随分ずいぶん大事ハルにかけよと教おし

れど。顔も心も憎^{にく}ていなる武兵衛に添^まは暫^{しば}しの義理。飽^あれる様に身を持ちなしや。何時^{なと}去^さつて戻^もしても忝^{かたじけ}いと受取^うて。其時^{そのとき}こそ打^うはれてすいた人に添^ましてやろ。合点^{あて}がいたらあいといや。あいといやとて撫^なさすり。ほんに又^{また}けしからぬけふの雪^{ゆき}。ひへる時分に氣をやんで。積^たんど起^おしてたもんなど。(74ウ) 下^{した}タに忍^{しの}んで聞^きク人の。有^あり共母^{とも}は白張^{しろはり}の障^{しょう}子^しをさせば。

いとゞ猶^{なほ}吉三郎は羽ぬけ鳥。立^たつもよはく手も足も。雪^{ゆき}にこゝへてそつと出^で。ア、母^{はは}のつどくいはれしに。一つとして無理^{むり}はない。不便^{べん}ンやお七が武兵衛へ嫁入^{よめい}する事を。否^{いや}共^{とも}庇^おり得^えいはずして。悲^{かな}しがるのは皆^{みな}おれゆへ。兎^とに角^{かく}に我^{われ}々が。過^く古^こよりうすき契^{せき}りぞや。御主人^{ごしゅじん}よりお指^さ指^さ函^ぼ有^ありし。云号^{うんごう}のお雛^{ひな}を嫌^{きら}ひ。刺^さ 自^{みづか}害^{がい}をさせ。親^{おや}仁^に様に歎^{なげ}きをかけし天罰^{てんばつ}の。忽^{たち}ち当^{あた}るといふ事^{こと}を。今^{いま}といふ今^{いま}思^{おも}ひ知^しつた。是^{こゝろ}より寺^{てら}へ立^たりて出^で家^けする。ふつくとおれが事を思^{おも}やんな。こちには思^{おも}ひ切^きつたるぞ。さはいへ今宵^{こんや}きた事を。ちよつと成^なとしらせた(75オ) やと。そつと寄^よつて障^{しょう}子^し 覗^{のぞ}けは我^{われ}影^{かげ}の。若^ももや内^{うち}へ見^みへんかと立^たのいて。ハア、迷^{まよ}たり。最早^{もはや}武兵衛といふて親^{おや}の赦^{ゆる}みがあれば。其目^{そのめ}を盗^{ぬす}は正^{しょう}真^{しん}の密^{みつ}夫^{とこ}。今日^{けふ}只^{ただ}今^{いま}さつぱりと縁^{えん}切^きつた証^{しょう}拠^こには。お七^{お七}に貫^{くわん}し此^{こゝろ}起^{おこ}請^こ。戻^もすより外^{ほか}はなしと押^お披^ひ。懐^{わい}中^{ちゆう}の石^{せき}筆^{ひつ}にて。誓^{せい}紙^しの裏^{うら}に細^{こま}々と。心^{こゝろ}のたけを書^かき残^{のこ}し。

笠^{かさ}の紐^{ひも}に結び付^つ。お七^{お七}が是^{こゝろ}を見^みるなら嘸^{さぞ}や恨^{うら}ん。責^{せめ}て様^{よう}子^しを云^い聞^きせ。おさめに顔^{かほ}がにしくと。見^みたや。逢^あいたや行^いきたやと。障^{しょう}子^し一^{ひと}重^へを関^{せま}の戸^{かど}の。明^あればやがて逢^あ坂^{さか}の道^{みち}共^{ども}。わかず泣^なれす。へつエ思^{おも}へはすごとと。寺^{てら}へ歸^{かへ}る所^{ところ}でなし。儻^{たう}武^ぶ兵^{べい}衛^ゑめ赦^{ゆる}さじと。奥^{おく}を目^めが(75ウ) けて馳^は行^いけは。久^{ひさ}兵^{べい}衛^ゑかけ出^でやア早^{はや}まるまい。様^{よう}子^しは先^まきから立^たり聞^ききました。イヤ武^ぶ兵^{べい}衛^ゑを何^{なに}ンでかばはつしやる。サ、其腹^{そのはら}立^たは尤^{なほ}なれど。喧^{けん}嘩^かの仕^しかへしじやと人^{ひと}はいはぬ。お七^{お七}をねとられた腹^{はら}立^たに。切^き込^こん

だといはれても大事ないか。イエそれはサアそこを思ふて。とめるのはこなたの為。氣を鎮めて聞カつしやれ。けふ芝居の戻りに。弥作めが腕を突折たを。武兵衛が呪てやるふと紙入より。取出した腕を見れば。松竹梅の巻物の包で有った雪の下といふ帕。それを手が、りに彼ノ一軸の。盗手を吟味しこなたに忠義が。立させたいと思ふから。お七に云含嫁入をす、めますと明カす詞に。ハア、左様の事共存(76オ)ぜず。早まつて今の振舞。先刻よりお袋の。お七に異見なざる、内に。ちらりと様子聞ながら。その所へ。氣の付カなんだは若氣ゆへ。まつびら赦して下されと。雪に頭を摺付くれば。エ、武兵衛にかつた三百兩の金が敵。思ひ合つたこなたに。娘を添せぬ口惜さを推量して下さい。昔の八百屋久兵衛なら。かゝる無念は有るまいと。悔めば吉三は有難涙。然らば寺へ帰ります。私が参りし事をお七には。ヲ、隠すのが互いの為。こなたに心を引かれて。武兵衛に大事を悟られては詮がない。早くお寺へいなつしやれ。ア、そんならお七へ。責てもの形見ぞと。さし出す蓑笠。久兵衛受取(76ウ)互いに別れの詞さへ。涙の水柱玉霰袖をへかざして帰りける。

久兵衛跡を見送ッて。いとしやお寺育で。ちよつと出るにも。供を連ねは歩ぬ人が。恋なりやこそ雪の降のに。寒さもいとはず。蓑笠きて。深草の少将の九十九夜にも増る深切。お七めが見おつたら。氣連の様に成ルであると。子ゆへに迷ふ親心。障子洩くる武兵衛が声ナフお七。嬉しいそもじの心底を。お袋に聞いて爰へきたと。しなだれかゝる影法師。様子きかんと久兵衛は縁の下タに身を忍ぶ。お七は障子押明て。さつても松に雪が積つた。此寒さではちよつとは解まい。わしが心もとけ兼るとうるさく紛す思はせぶり。(77オ)武兵衛は現たはいもなく。ム、解ぬとは此鼻が。吉原通するによつての疑イか。サア日外お寺で。吉三様とわしが中の。起請の吟味さしやんした代には。吉原のふかまがおまへの所へ書イ

ておこした。起請が有ルか詮義する。紙入^{地ウ}レをおこさんせと色^{ハル}に事よせ。引出す手先^色をしつかととめ。イヤおれが紙入^詞には。命にかけかへの印判。其外大切な物が入^ハれてあればむさとは見せぬ。ハテどの様な大事の物にもせよ。真実^{しんじつ}わしを思ふてなら。隠してゝは有ルまいけれど。根^{うそ}が嘘じや。偽^{地ハル}りじやと氣^{フシ}を持たすれば。

縁^{地色ウ}の下^ハには父久兵衛。どうかこふかと身^ウをもみあせる義^{みの色}の音^ト。武兵衛^{ハル}は(77ウ)一途^ブに吉三^色と心得。ナフお七。けふの雪^{ふりこめ}に降^ハ込られて。此下屋^ハには。のら犬^{かぐれ}が蟄^れでけつかるそふな。が。もし犬ではなふて吉三^色なら。そなたはたんと嬉^ハしかろと。うらどいか、ればお七^{ハル}は何^色ンの氣も付^詞ず。イエ今では吉三^色様もわたしも互^ハいに秋風。ヲ、其詞^詞に違^ハイがなければ。此紙入^ハをそなたに渡^ハして吟味^ハさせふ。サア商売^ハからの八百屋^ハ万の神々^ハを誓^{せいごん}言^ハに入^レ。おれ^{地ウ}が目の前^ハで湯起^{ゆきじやう}請^ハを取^ハつて見^ハしや。エ、イ湯起^詞請^ハとはへ。ホ、合点^{ゆく}が行^ハまい。爰^ハに幸熱^{にへゆ}湯^ハが有^ハると。引^{地ウ}ちらしたる絹^{きぬ}のとき物^ハひんまろめ。湯^{ゆのし}敷^ハの釜^{ひつつかみ}を引^ハ摺^ハ。サア此湯^詞へわごりよの手^{つごん}を突^ハ込^ハで。誓^ハ言^ハを立て見^ハしや。嘘^{うそ}なりや忽^やち湯火^{やけど}瘡^ハ(78オ)する。定^{ちやう}なりやちつ共^{あつ}熱^ハふない。おつ^{地中ウ}くしやると氣^ハが廻^ハる。サア^{ハル}くどうじやとせち^{フシ}がへは。

戻^{地色中}りか、つてお杉^{ハル}が恠^{びつく}り。下^ウタに忍^てんで爺^て親^ハが。心^{ハル}をこがすせつなさを。しらぬお七^{ハル}が悲^ハしさつらさ。父^ウの云^ハ付^ハ夫^ハトの為^ハ。神^ハや仏^ハの力^中ラにて。湯起^ウ請^ハを首^{しゅび}尾^びよふとらせて給^ハはれと。心^{ハル}に念^ハじつ、込^ハム両^ハ手^ハを押^ハとめ。ヲツトそれで心^{しんてい}底^ハ見^ハへた。もふ湯起^ハ請^ハには及^ハばね共^{ととも}。逆^{よも}の事^ハの疑^ハいよらし。此熱^ハ湯^ハをそなたの手^ハづからまつかふ仕^しやと竹^{たけ}縁^{えん}の。上^ハよりざんぶと打^中あくれは。ぐらつく湯^ゆ玉^{たま}は久^{ハル}兵^ハ衛^ハが。弓^ウン手^ハの肩^{かた}より半身^{はんしん}朱^{あけ}に悶^{もん}絶^{ぜつ}すれば。ヤア誰^誰レじやぞいなとお七^{地ハル}が仰^{けうてん}天^ハ。立^ウ聞^ハク杉^ハも氣^ハをあせれば。ハテ(78ウ)お七^{ハル}恠^{びつく}りしやんな。犬^{いぬ}じやくと紛^{まぎら}す所^ハへ。

母はとつゝ出来り。ナフ名主様や玄伯様のお待兼と。いふに武兵衛が顔につこり。今の心中見るうへは。望の通り紙人を預ける程に。千話文起請の類が有ルか。とつくりと見ておきや。此拍子に奥へいてきんご引いたら。とうだいにあざがあがると。悦び武兵衛が入ければ。

杉はかけ寄むながら取コレお七様。いかに武兵衛づらに心中が見せたいとて。吉三様によふは熱湯をと。いふに驚きナフそれは誠か悲しやと。お七も母も狂氣のごとく庭におり。蓑笠引のけコレなふ申吉三様。引おこせは父久兵衛。息も絶入ルやけどの苦痛。（79オ）こはそもいかにと三人が。すがり寄っていたはれは。

お七は悲しさやるかたなく。勿体なやと、様の下タに隠れてござんすを。犬じやくと武兵衛にだまされ。いかにしらぬこつちやとて。親に熱湯をかけるとは。不孝共過共。いふにいはれぬ身の罪科。わたしに罰があたらいで。あたる者はありやせまいとくとき立て泣きくやめば。母も涙にかきくれて。しらぬ事なりや。娘お七が籠相共しかられぬ。何しの為に親仁殿。爰に忍んでござつたと。問れて久兵衛くるしげに。ヲ、嘆合点がいこまい。此蓑笠を見て。吉三郎が忍んで居やると武兵衛が心得。お七が手づからおれに（79ウ）熱湯をかけたればこそ。思ふまゝに願イが叶ふた。コレ杉。其鼻紙袋に。何ぞ目覚の物が有ふ早く見や。アイとお杉が改ムれば。久兵衛は老人の骸のひりつきこたへ兼。コリヤやいお七もふ泣クな。そちが不孝にはみぢんもならぬ。嘆ア庭の雪を。ちやつと付けておくりやれと肩をぬげば。赤子の肌見る様にたゞれし所へぬり付る。雪より先きに親と子か心。きへ入計り也。イエ申此紙入に。何ンにもわたしが目覚の物は。ハテないとはいはれまい。其帕は親父采女殿より預りし。湯島の宝物松竹梅の一卷が。包んで有った雪の下の幌さ。エ、イそんなら色

が薄紅梅の筈成ルに是は縹。(80オ) サア人の咎をおそれて。武兵衛が染かへたに極つた。灯にかけてとくと地紋を見られよと。いふ声聞取ル門トの口。いつの間には太左衛門内の様子を窺足。そつとすぼめる傘の蛇目光らす行燈の光りに。杉は帕をすかし見て。いかにも織模様。雪の下の唐草が有からは。ホ、其氣が付キサへすれば。委細云教るには及ぬ。今より八百屋久兵衛が下女の杉ではない。湯島の神職。征采女殿の娘小雪上郎。お尋の松竹梅の一袖を包し帕。万屋武兵衛が持て居ましたと代官所へ訴へ。御親父の宰者の難義を救れよ。ハア、忝いと帕を戴く後より。(80ウ) ちよいともぎとる太左衛門。ヤア何仕やるとむしやぶり付クお杉を蹴のけ。ついでかゝる母もお七もはり廻せば。見兼て久兵衛。片身は叶はぬ片手業。せんかた尽て見へたる所へ。

丁稚の弥作大小ぼつ込飛んで出。何シの苦もなく太左衛門をどうと投。持たる帕をばいかへし刀ひんぬき割打に。りうくくくと打のめし。動かはたんだ一ト討と。にらみ付ケたる目の内りんく立派な侍イ。顔打ながめ人々は。恠りするやら嬉しいやら。八百屋の見世の薯蕷。鰻に成しも斯やらん。

手並にこりぬ太左衛門。ヤイ素丁稚め。どこで大小を盗んでうせて。阿房力でよふゑらいめに(81オ) 合せたな。其帕を人手へ渡しては武兵衛やおらが首が飛。戻しあがれと掴付クを。手玉のごとくひつくりかへして踏付く。腰の手拭猿轡。徹素しこいて後手にしめ上げば。お七親子は手を打て。コレ弥作。俄にそなたは。強ふ成つてりかうに成て。侍いに迄なりやつたはどうした事。ホ、いづれものふしんはれぬは道理く。久兵衛殿。拙者が頬は見忘れらるゝ共。此大小をよもや忘れはなされまいと。さし出し見すれば興を鮫鞘柄廻り。ヒヤア是は慥。湯島の神職采女殿の大小。ア、いかにも其

通り。そこもとの指図さしずにて舅しゅうとの魂たましひ譲ゆづり受うけた。湯島三吉でござるはいの。エ、イ采女殿の掣し（81ウ）三吉は。器量よし
の角前髪まへがみで有あったが。扱とは。年とし關せきての痲瘡はうそうゆへへんばになられて。顔の住居が替かつたのじやの。イ、エイナおまへがた計はかりじ
やない。女房にようのわたしさへ日外是にちがいぜいへござつた時には。見違みちがエましてござんす。ハ、ハ、ハ、ハ、生壁なまかべ十露盤じろばんでへさへた様な頬つらに
成なり。髪かみもぬけ。肺氣はいきかるれば声迄こゑも。替かる程ほどの重おもき痲瘡はうそう。在所おともの親一家共おんなが。いつかい世話せわにて漸やうやくと快氣くはいきし。江戸へ
歸かへつても。昔むかしの三吉と人ひとが見みしらぬを幸さいに。女房によう杉すぎとしめし合せ。弥作やせつと名なをかへ作り馬鹿ばかに成なて。先まづン々月つきから此家このうちへ奉ほう
公こうに入い込こしは。兼々かねかね心得こころえぬ奴やつだと思おもふ。武兵衛ぶべゑ太左衛門たざゑもんに取とり入いり。松竹梅しょうちくばいの行衛ぎやうゑを詮義せんぎせん。思おもひ付ついたる一大事いちだいじ（82オ）
なれば。かほど頼たのもしき久兵衛くべゑ殿どの夫婦ふうふにさへ。心こゝろを奥おくの木部屋きぶゑの内に此大小このおほいを隠かくし置おく。今迄いま三吉さんきちが身みの上うへをつ、みし段だん。
御免ごめんなされて下くだされとお杉のすぎも俱ともに侘わづるにぞ。イヤ其侘言そのわづごはこつちから。弥作やせつくと。下くださげそふにいひました赦ゆるして下くだされ。
イヤサそれは互たがひイ。お七殿おしちどのの色いろに迷まよつて武兵衛ぶべゑめが。此帕このふちを渡わたしたうへは。代官所しろへ言上ごんし。松竹梅しょうちくばいの一軸いちしやくの御詮義ごせんぎを願ねがひま
せふと。いふに久兵衛くべゑくるしき中なかにも勇いさみをなし。ヲ、いかにも。一軸いちしやくの行衛ぎやうゑが知しれば。吉三郎きちざう殿どの親子おんなの忠義ちゅうぎも立たち。采女さいによう
殿どのの牢舎らうしゃも通とほれ。こなた女夫にようぶの悦よろこびは久兵衛くべゑが満足まんぞく。ヤイ太左衛門たざゑもん。此弥作このやせつが（82ウ）腕かひなを突折つみおたといつしはな。打身金うてみかね
瘡立さうだて所に癒いる。此帕このふちを持もつてけつかるかためし見ん方便てだて。けふも芝居しばいの戻かへりに。ひつたくらふかと思おもひしが。帕このふちの色いろが替かり
しゆへ。とくと実否じつふを糺たさん為ため。やつぱり虚気うつけに成なつて居ゐた。今爰いまで久兵衛くべゑ殿どののやけどをいやし。雪ゆきの下の奇特きとくを顕あらわし
試こころみんと。偏体へんたいを帕このふちで撫廻なぐませば。死体したいのごとく変へんじたる。色いろも痛いたみも即座そくざに直なつた。コレ見みや鼻はな。娘めいも悦よろこべくと。手てを打う
ふつて見みせければ。ほんにふしぎや嬉うれしやと悦よろこび合あフぞ道理也道理也道理。コリヤく娘めい。武兵衛ぶべゑをたばかる邪魔じゃまになろかと。さつき

には隠していたが。吉三殿がわせられて。又逢フ迄(83才)の形見とて。残しおかれた此蓑笠と。渡せはお七は取すがり。歎くをせいして湯島三吉。ア、猶予する所でなし。もし武兵衛めが風をくらふて逃ふも知れぬ。御夫婦は座敷へ行て氣を付られよ。拙者は是成ルどろぼうめを代官所へ引渡し。仰を受けて又もや武兵衛を擲取に向ふべし。ホ、然らば片時も早く急れよと。夫婦は奥へ。お杉を引連レ三吉は。縄付引立別行。

お七は更に夢現。吉三様シの此蓑笠。形見にせよとは心が、りとよく見れば。昔笠の紐に結付ケたるは。文でもなしとひらけば悲しや。わしが方より吉三様へ送りし起請。裏につどく(83ウ)書残す。訳は出家の思ひ立。縁切ル程に親々のさしづに随ひ。武兵衛へ嫁入せよと有。こはそもいかにと計りにて。蓑と笠に抱付キ前後ふかくに伏しづみ。思へは先に。か、様シの異見なされし時。武兵衛へ嫁入する事を。一途にいやといはなんだが。お腹が立ッた物である。今の帕を取戻す。爺様の云付と。いかに御存なければとて。お寺へいんで。出家せふとは曲もなや。あんまりむごい思ひ切。云訳せふにも侘せふにも。最早お出は有まいし。杉は居やらす便りする。頼ミも綱も切果てたかと。身を打ふしてむせび入。せめては君がうつりがの。残る形見の此蓑や。笠もかぶつて此様に。しよんぼりとした(84才)形リをして。雪にこゝへし水鳥の。翅しほる、袖の雨。着て見ては泣キ。捨ては泣キ。爰に歎けは座敷には三國一と云いはやす。聳とは憎や穢しや。それゆへにこそ相思ふ。中を儕レに引さかれた。我カ夫戻せ呼戻せ。出家落した。罰が当つて生キながら。火にはまつても大事ないとかけ廻り。形も乱れ氣も乱れ。乱薄に吉三の文字。模様は縫し下着の振袖。涙にしほつてかつぱとふして泣沈。思はず火燵へくばつてはつと。輝る煙に驚きしが。消もやらず両手に取つて。ハアくそふじや。思へば過し類火がいも

せの中立ち。又もや。家が焼たらば。寺へいて。逢れると。結の神のおしらせ（84ウ）かと。ふつと付いたる出来心袖引つちぎりぐるくと。蓑にひんまく身の因果。

折から立ち聞ク武兵衛が悪意地。につくい女郎め。いつその事火付ケにして。訴人せんと隠れかゝめば。

表へ三吉組子を従へひかへたり。お七はうるく庭の人音ト。悲しや武兵衛がくるそふな。隠れん物と二階へあがる。

階子は苦患の三悪道。ぼつともへ出す蓑の火を。見るより声立テ。アレくお七が火を付たと。戸口へ出るを武兵衛取つたと組しけば。二階の障子にくはつともへ立ツ火花に周章。お七は下タへ遠近の山風。恋風吹立て我より。先へけふるらん

五之卷（85オ）

訟を聴こと吾猶人のことしかや。戸倉十内私の計ひなく。理非を鏡の牢屋形。科人刑罰の沙汰其隠れあらざれば。命乞の願ひによつて。吉祥院の日玄上人。円乗寺の南縁阿闍梨。夜の内より来臨とて数の灯か、げさせ。近習取次諸役人異義を。たゞして相語る。

日玄上人す、み出。愚僧が旦那。本郷八百屋久兵衛が娘お七。死罪に極まるよし。十悪五逆の罪人も助くるは仏のじひ。

其流レを汲我々。何とぞ彼レが命を乞受。菩提の道にす、めたしと。あじやりも俱に頼るれば。十内眉をしはめ。日玄上人は我甥吉三郎が厚恩の師。又南縁あじやりは五松殿北のかたの御連枝。彼レ是もつて黙止がたき願ひ。お上にも不便の余りに去（85ウ）年ンの冬召捕りしより。一ケ年余も御詮義を延し。一ト言にてもお七が存ぜぬといは、助度ク思し召るれ共。吉三郎に逢いたさに私が火を付ケましたと。本人が白状すればぜひもなし。殊に其節牢舎せし万屋武兵衛といふやつ。見届ケ

て訴人致せば。何レの道にもお七が命助かる筋毛頭なしと。事地ウを分クケたる一言ハルに阿闍梨重セて。イヤ十内殿の了簡ハルに及ズは。我ハレ々直キに伝奏罷出テん。サレハサ其願イ叶ハぬ時ニは。御所ミ共ニに御寺ミをひらかれんより外ナし。さすれは女ツが罪ツに罪ヲ重シる道理。此願イは思召トとまり。跡地ウ申フて遣サるが御出家ノ役タるべしと。理ウ非明白ナル詞ハルにハツト顔見合セ。とかフ諾ハも長袖ノのしほクとして帰ラる。

取次地色ウの案内ニつれて安森源次兵衛。三吉夫婦ハルを伴ハルて打中通リ。ナ二十内殿。雪ノ下ノの帟ヲ染直ナしたる者(86才)を。三吉が働キにて吟味シ。早速町人ヘ預ケ置注進致したゆへ。夫婦共に召ツれて参リしと。一家ナがらも公用筋ハルいんぎんに述ケられは。ア、それは三吉が重クの手柄ガ。ソレク武兵衛太左衛門。兩人共に引出セと云フる時シも有リ。つかク来る稲垣平太。十内ハルに打色向ヒ。明日明はお七が火罪クハに行クる、ゆへ。夜ノ内ヨり是ヘお詰メなされてゴざると承リ。掛カ合ナれは武兵衛太左衛門ニ。雪ノ下ノの御詮義モ有ベし。俱々に立合吟味致スん為ニ参上。御所地ウ御免トと上座フシに直レは。獄屋地色ウより下部共ニ二人ノの縄付目ハル通リに引スゆる。十内色きつと見ル。ヤイ武兵衛。松竹梅ノ巻物ヲを包シ此帟ヲ。其方ガ持テ居タからは。一軸ノ在リ所知たるに紛レなし。あらがは、拷問ガするがどうじややい。ハイ幾度イお尋ナされましても。其帟ハはお尋ノ雪ノ下(86ウ)ではゴざりませぬ。私ガ親共ガ存生ノ時ニ。湯島ノ天神様ヲ信仰し。夢中ニ授ツつた帟ジやと。死ナれた母者人ノの云伝と。申上れは太左衛門ニ。いかにも私メも聞及んで居マすが。雪ノ下ノの地色トは違フて。武兵衛ガ帟ハ細ハいといはせも立ズ三吉ニ。ヤイうぬらガ其巧ハは顕レた。則チ武兵衛ガ帟ヲ染サせたる。浅草ノ嘉六トいふ。染物屋ガ白状したと。聞イて二人ノが驚ク色目ヲを見て取ル平太。ヤア何ヲをきよろクうろたへる。此期ニ及ンで隠スは未練ハ。既ニ八百屋ガ娘ノ

お七はな。火を付た事を。さつぱりと白状したによつて火あふり。うぬらも有様フにぬかせば軽ふ取ても獄門か磔。早くくたばつて牢屋のくげんを通る、様に分別せい。ナ。合点か性根をすへて。サア真直に白状せいと。目顔でしらする詞の謎。(87オ)とけてもとけぬ二人の縄付。イヤいか程におつしやつても存ぜぬ事は申されぬと。あらがいつのこれは源次兵衛。ナフ平太殿。其元の今の仰は兩人の者に。いへいふなど有ル詞のうら。先達て日本堤の樋守与五蔵が。さし上た此手紙よき証拠なれ共。名書キが破して有ル計りに。長々の間此詮義引擺といへ共。快典をかたらい盗マセたる。頼手は身が推量に違イは有まい。ム、其頼手は何者ときさつさうかはれは十内しつめて。ア、御兩人の其論は無用くくと制する折から。あがり屋の内囀俄に騒追々逃出る下役人。ナフおとろしや。湯島の天神様榎采女にのりうつり。覚なき身を獄屋にくるしめ宝物をうばふ大悪人。一々に掴さかんと怒。旬あがり屋の。囀をめぐりく押破て出(87ウ)て参る。御油断有ルなど云捨テて走行。

人々ふしぎと驚く中に杉は悲しき父が身のうへ。コレ三吉殿早ふいて鎮てと。身をもみ歎く透間もなく。又騒しくかけくる下部が申上ます。松竹梅の宝物を。盗ミし者共一人も生ケては置カじと。神主采女なんなく囀を打破候と。言上すれば俄に武兵衛太左衛門。覚有ル身の空恐しく齒の根も合ずふるひ出し。ナフ平太様。何いふも命が惜ひからの事。こりやまあ何ンとしませふと。おろくすれは平太ははつと赤面し。立んとするを髑囀で十内捻すへ。懐の一軸取て引出し。縁端よりはつしと蹴れは。白洲へどうど地響打てうごめくを。三吉かけ寄踏付く。高小手手に禁しは心地よくこそ見へにけれ。

あがりやよりゆうくと(88才)立出る采女が風情。杉は見るよりヤアと、様かいの。お身にけさ、はなかつたかと三吉諸共尋れば。ホ、聲も娘も合点が行くまい。天満宮の此采女にのりうつり給ふとは。彼等に巧を白状させん十内殿の頓智ぞと。聞より平太はがみをなし。エ、残念や。松竹梅の神筆の失セたるは。源次兵衛親子が仕業にして罪に沈め。術を廻らし五松の家を断絶させ。時をはかつて神筆は某が尋出したと。禁庭へさし上ケ武兵衛太左衛門を一廉の武士に取り立んと思ひしに。斯顕れし奇怪さよと。二人ンも俱に身をもがげば。十内件ンの一軸を帕に包んで恭押戴き。三人の者共が根深きたくみ。浅はかなる我術に落入しは。是偏に天神の御利生と覚たり。采女は湯島に立帰り。源次(88ウ)兵衛殿に京都の首尾宜ク頼申されよと。武功にはこらぬさしづに采女御神筆を受とれば。ホ、何から何迄十内殿の心づかひ。かゝる様子京都へ聞へなば。主人五松殿も嘸悦び。ア、いかにもく。平太が罪科は追ての御沙汰。先ッ三人の縄付獄屋へひけと厳しき下知に雑人共。引立入れは源次兵衛。此上は一刻も早く上京仕らんと互イの挨拶。采女をいたはり三吉夫婦打連へ皆々立帰る。

透をはかつて取次番白洲に出。本郷八百屋久兵衛夫婦。とくより腰掛に相待罷有ル。いかゞ仕らんと窺へは。ソレく是へ呼出せと仰を受て云イ次にぞ。

夫婦打つれ牢の食。持ッ手もたゆくおづく。と。掾先キに手をつかへ。娘お七が牢舎致した初メより。お願イ申て(89才)牢の食。毎日此母が持運ぶを。役人衆が取次で下さりますに。けふは何やら御用が有とて。夫婦共に御前迄召まするは。定メて娘をお助なされて。コレく。鼻。恐おほい御前ンじや。つかくと物いやるな。イヤ召まする御用は何か存ませぬが。

先ッさし当つて牢の食。早ふとらせたふござります。ホ、其食物は最早持て帰れ。エ、イそりや何故でござります。ヲ、そち達も久々お預ケの身と成り。世間へ出ねは何シにも様子はしらぬ筈。歎くを不便に思ひ本郷の町人共にも。深く包めと云付置しが。お七は三日以前より。両国橋昌平橋日本橋にさらされ。明ッれは鈴の森に引出し。火罪に仰付らるゝと聞より夫（89ウ）婦は仰天し。エ、イそれはほんか悲しやと。うろくきよろく牢屋の方を打ながめては立つ居つ。かつはとふして正体も泣ッより。外の事ぞなき。ホ、歎くは理り。我しも不便さ助る筋も有ふかと。幾度も呼出し云訳せよと教れ共。いつとても替らぬ返答。吉三郎に逢ん為。自身に火を付たと潔白に云放せば。ぜひなく法に行ふ事。前世の業と明らか歎キをとめよ去ながら。今生の対面もけふ限りなれは。暫時の間暇乞は赦す。それくお七を引出せ。畏ッて下部共牢屋へかけ行連出る。

むざんやお七は身の科のつまる命我ながら。けふを限りと白無垢に。かゝる禁あられなく。しめ付られてたよくと。
（90オ）顔得上ず泣居たる。

見るに悲しき両親は走り寄てコリヤ娘。吉三殿に逢度ッは。仕様模様も有りそな物。大それた事仕出したゆへ。わりやもふ死ヌる。火あぶりに成ルはいやい。ア、是親仁殿。たつた今わしに麴相いふなと叱りながら。つかくと物いはしやる。大それた事仕出したとは娘じや有まい。はてなんぼせつない事が有共。我カ家を焼よふな無分別な事はせぬ筈。其日は嘉例の餅搗で。若も大勢いそがしさに。火を鹿抹にかな。誰か仕業共しれぬを。お七でござると訴人したは。悪意地な武兵衛が業。そなたじや有まいの。サア。其寛ない事を。さつはりと云訳しやれは。今でも命助ふ（90ウ）とアレ。代官様がおつしやる

と。傍^{地ッ}からく、める母のじひ。それとしる程^悲悲しく。愚^詞な事をいはしやんす。御詮義の抑より。吉三様^ンに逢^イいたさに。私が火を付ましたと申上たに違^イはない。わしや嘘^いふて身の科^上を。人におふせる気はないぞへ。それゆへ詮義はとふ^地落^ルで。橋々にさらされるは。世間一まい人もしり。殺さるゝ今と成何程^侘侘でも歎いても。お助なされふ^地咎^ルもなければ。助かる心も更^ッたなし。とはいひなから稚^カから一人り娘と御寵愛^愛。養育^養せられし親の恩。送^ウる事こそ成^中まいけれ。責^ウて一日半日もお心休^ルる事もなく。かゝる歎^キをかける事。わしや子ではない。魔王^{まわう}じや(91才)鬼^{おに}じや。憎^にいやつじやとお二人りに。お叱^し受^ウるが罪^{つみ}亡^シし。必^ウ々逆なえかうばし遊^ウすなど。身^ウの悲^しさを押つゝ、み親の歎^いを諫^いる程。二人りが胸をさく^色心地。ナフ其心根が猶^イぢらしい。かふ成事と知たらば。親仁殿にさからふても。嫌^きやる武兵衛を智^ちにせふ共いふまいし。吉三殿を乞受^ウて添^地そふ物を情なや。小家一軒立ふとて纒^{わづか}な金に義理立て。娘を殺す我々こそ親ではなふて前生^{さきじやう}の。敵^ウと思へば我^レながら。恨^ウしいやらつらいやら有^ウにあらぬ身の難義。遁^ウるゝ筋はない事か。産落^{うまれおち}ると娘が名をお七と付^ウケたも。日比信^ウずる七面^ン様のお守りで。災難もない様にと頼^ウをかけ(91ウ)たもむだ事か。お題目の功力はないか。番神様のお力で。助かる事はならぬかとくどき立^ウく声^中もおしませ。泣^ハければ。ハテ噂^{うわさ}痴^ちな事いやるな。神仏のお力で。罪科^{つみとが}が遁^のふ物なら。悪作らぬ者も有^マまい。お仕置^{しおき}者もない筈。それくになした科未来の事は扱^あ置^き。現世^{むく}で報^はふは針^{はり}の先^{さき}。遁^ぬぬ証^{しやう}扱^あは今聞^き通り。我^{わが}と我手^{わがて}に火を付たと。いふが自業^{じごふ}と思へは。おりやもふ泣^なもせぬ。悔^くもせぬ。さつはり^とと明^あらめて居^ゐるが血^ちを分^わケた親^ハ子^ハの中^中。どちらでも殺^{ころ}されるは御征法^{せいほう}は立^たちそな物。成^なふ事なら。あの娘が代りに立^たて。おりや死^したいと心^こ一^いぱい胸^{むね}一^いは。せきかけく(92才)せくりくる涙^{なみだ}に声^{こゑ}もむせかへれば。イ、ヤこなたより此母^{こゝろ}が。先^まきへ死^したい。殺^{ころ}されたい。生^なき

てうきめが見ともない。お代官様頼ます。じひじやくと手を合せ。拜つ侘つ身を悶泣させ。ふこそ道理なれ。俱に哀と十内も目に持涙打はらひ。何程歎き悲しむ共。娘が罪科通る、筋なし。況科なき汝等。代りに立ッ事思ひもよらず。叶ぬ諄時うつる早く立ていけく。御意じやきりく立ませいと。声々に叱られて。アイく嗚。おりや足が痺たか。とうも爰が立にくい。ヲ、痺レもせふ。腰も抜ふ。命乞が叶ぬ物。去ながら。今一つのお願イ。せめて娘が念ばらし。吉三殿を呼寄て。たつた一ト言暇乞が。ア、是か、様。訳もない事いはしやんす。吉三様も此様子聞てなら。飛（92ウ）立ッ様に有ふが。前方の訳があれば。きびしい寺の云付で出られぬ筈。見へぬが結句わしが為なんば覺悟きはめても又顔見たら。未練な心が出よふ物。迷イの種類じや。わしいややく。死んだ跡では一遍のゑかうを頼ムと伝へてたべ。とはいふ物の例なき女の罪に大それた。我カ科我レと身をこがす。此世からのあび焦熱。うかむ世もなき未来の苦患。浅まし身の果やと歎ク涙は紅の膝に血汐の潤なせば。夫婦は摺寄。にじり寄離がたなき恩愛の。思ひ尽せぬ憂涙身も浮計り取乱し。前後ふかくに泣しづむは目もあて。られす哀也。既に其夜も明行ケは。警固の役人篠崎一平罷出。路次の用意馬廻り。地獄門の外トに（93オ）揃ひ候。科人ひかせ申さんと窺へは。それく急げと下知のした。縄取お七を引立る。マ、マ、待てくださりませと。と、むる母は菩提樹の。数珠をかた見と取出し。娘が首にかけさすれは。

父は朝夕読誦せし一部八巻法花経を。未来のみやげと懐へさし入るればさしうつふき。手が叶はねば戴く心有りがたふござんすと。いふが此世の聞おさめ。夫婦は目もくれ心さへ。はてしなくく取すがるを押のけつきのけ引て行。

うしろすがたをふりかへり見返り。見をくる名残の袖。ひたすなみだの露の玉。もろくもきゆる憂命はかなや。悲し三重

(93ウ)

道行 浮名の八景

はだの小袖に。吉三とかきし。ぬひのもやうを身に。そへて。ふたり行くとは。思へ共。我レは。ひとりの。しでのたび。
おぼつかなくも。よぶこ鳥のあはれ。なるかな。お七こそ。さい。恋路のやみのくらがりに。よしなき事を。しいだして。
恋の罪科われひとり。かきあつめたる。玉ば、き。あこがれこがれ行末は。かゝるうき身をこ、かしこ。見つけ。くくに
さらされて。日本橋よりひかれゆく。見る人袖をしほる人。見かへる人も皆人も。(94オ) やなぎはらの、つくくしよ
そめにあまる涙川。わたりかねたるひのへむまふじの。けふりと。もろともに。きゆるいのちぞはかなけれ。くびにかけた
る玉の緒のたへなはたへね母きぎの。かた見の念珠くりかへす守は父の給はりし。一部一くはん後の世を。たすけ給へや
なむ妙。法れんげきやう南無めうほう蓮華経。いつしか君になれ馴染。かはるまいぞやかはらじときしやうを。書いて取
かはし。小ゆびを切りて。血をしほり。互イにかたるむつごことに。さりし御げんの夜の雨。とのごまつまの置(94ウ)ざ
ん。あふ夜あはぬの夜。いさようらみても。外かにあくしよは。せいもんとよあだあし。男の。あだ事や。ひんの盗に恋
の歌三十一文字かきならひ。湯島にかけし松竹梅本郷お七としるしをく。十一さいの筆の跡見し人あらはわたくしが。形見
と思ひ一ぺんの御多かう頼ミ奉ると。顔さし入る、懐の。内よりもる、振袖にたまる。涙ぞあはれなる。身は人くずと。
いは、いへ。笑は、笑へ一トすじに。思ひそめたる恋なれば。たとへ此身をたらぬかれ。ほねは粉となれ灰となれ。こんは
(95オ) 此世にとまりて。かげにつきそひ身にうつり二世もへ三世も我カつまと。手に手をとりにてれんげのり。のりのと

もづなきれはて、我^{中ウ}レと火^{中ウ}に入^入ルなつ^{中ウ}のむし。こがれじにとは。此事^{中ウ}か。竹^{ハル}の子ゆへに迷^{まよ}ふ親。めうがもしらず恩^{をん}しらず。いかにわるめといへはとて。気^{中ウ}ま、に心持^{中ウ}なしてあられ。すくなきしめじとは神^トも仏^ナもへしらま弓^引みつばよつばの。よめがはぎ。はぎもあらはに三^み田^たの郷^{がう}。乱^{スエテ}れし髪^{かみ}と諸^ウ共^中に。ずいきの涙^ウおちこちの。ながめは爰^引もにほの海^{うみ}。さゞ波^{ハルウ}（95ウ）よする。品川^{しながは}や。い。よ。いよ。いよ。はま。あに。入^入江^江のあまおふね。見^ウへつ隠^{かく}れつ。一^{ハル}かすみのあれ。ゑから。さきを。見^キ渡^ワせは。よし原^{ハルウ}すゞめ口^ク々に。とがのよしあし夕^ユしぐれ。恋^{中ウ}の邪魔^{じやま}する。男^ウこそ。をいろのいのちのせたしゞみ。我^中レは仏^フになりもよし。ふりも。よしなやよ。いさよ恋^中ゆへに。いのちのとうげ。今^下しばし。しばしとむる人もなく。心^{ハル}も駒^{こま}もせはしげに。行^ウク道^{ミチ}しばも露^{つゆ}ぞうく。ひくあしなみの数^{かず}つきて。こゝぞ名^なにふる鈴^{すず}の森^{もり}さいご場^ばちかく。下^下なりにける。（96オ）吉^{△地ハル}三^三郎^郎数^数多^多の人^人を押^ウ分^ワケくかけよるを。ヤア何^何者と警^{けい}固^この武^ぶ士^し押^ウ隔^{かく}れは。情^{地中}深^深き篠^{しの}崎^{さき}一^{ハル}平^平さなせそ者^者共^共。くるしからず暇^暇乞^ぎお仕^しやれと。赦^{地ハル}す詞^詞にナフお七^七。皆^ウ我^レゆへに浅^あましき其^中有^有様^様と。歎^{○ハル}けはお七^七は顔^{かほ}ふり上^上。ヤア吉^吉三^三様^様か。よふは爰^{地ハル}迄^迄きてくださんした。わしや生^上キなから火^ウにやかれて。しぬるいまはの際^{きわ}迄^迄も。おまへに逢^あいたいく^くの念^{ねん}がとゞいて。お顔^顔を見^ミたりや。思^思ひ残^{のこ}す事^{こと}はなし。さはいふ物^{もの}のと、様^ウやか、様^様の。歎^{ハル}キの程^{ほど}がいとしひと。跡^{あと}は詞^{ことば}もないじやくり。涙^{なみだ}の白^{しろ}雨^{あめ}馬^ばの背^せもひたす。計^中りに見^ミへにける。ヲ、そなたにかはり此^{△詞}吉^三。久^く兵^{へい}衛^ゑ殿^{でん}御^ご夫^ふ婦^ふへ。随^{ずい}（96ウ）分^わ孝^{こう}行^{こう}に仕^{つか}へよと云^い置^おいて。父^{ちち}源^{げん}次^じ兵^{へい}衛^ゑ殿^{でん}は。御^ご神^{しん}筆^{ひつ}を守^もりまして早^{はや}上^{じやう}京^{きやう}なされしが。我^わ身^みに一つ^{ひとつ}の願^{がん}望^{ぼう}あれば此^{こゝ}通^とりと。みどりの黒^{くろ}髪^{かみ}切^きはらひお七^七が袂^{たもと}に押^お入^いるれは。コレなふ申^{まを}吉^三様^様。先^まきた、しやんしたお雛^{ひな}様^様や此^{こゝ}お七^七が。善^{ぜん}提^{だい}の為^{ため}の御^ご出^{しゅ}家^かか。それ程^{ほど}やさしいお志^し。見てしぬれはわしが身^みは。此^{こゝ}世^よからなる仏^{ぶつ}ぞや。

吉祥院で剃髮あらば。お七がぼだいと。御出家の身に浮名が立ッ。お雛様の御宗旨なれば。円乗寺のお弟子に成り。此江戸の出口くんに六地藏を。建立なされてくださんせ。ヲ、其遺言を立るは他力のすゝめ。法花天台元ト一つ。そなたのしるしは我カ住所にたて(97才)おいて。跡ねんごろに吊はんといひ聞すれば。ア、有がたやと声をあげ。たがひの涙は末期の水。小石川の円乗寺に。今に朽せぬお七が墓。江戸の端々出口くんの。濡仏ケと名に高きは吉三郎が建立也。時刻うつれば篠崎一平。それくお七が馬をやれと。したふ吉三をつきのけく。最期場さして追立ゆく。

吉三は跡に狂気のごとく。エ、思へは出家するも未練。おなじ冥途の道づれと。既にじがいと見へければ。久兵衛夫婦かけ来り。コレこなたか切腹めさつたとて。お七が命たすかりはせぬ程に。跡とむらふてくだされと。とむむる所へおちの内(97ウ)三吉召つれ馳付ケてヤアく吉三。悪事の張本平太は遠島。武兵衛太左衛門は獄屋にて打首と。孤に包ミし二ツの首を見せければ。追々に上人阿闍梨。ぜひに女が命乞と最期場さしてかけ行給ふ。云伝へたるお七が生レは寛文六年。丙午の三月廿九日とや。誕生の月日をかへず。天和二年弥生の末の九日に。死するも不思議。吉三郎は特に近江の志賀の里。ぎずいと呼れ知識の誉。其名年ふる鈴の森。恋の緋桜引かへて。今染出しの江戸紫。栄へさかふる君が代の尽せぬ。恵ぞ目出たけれ。

延享元年甲子四月五日 作者連名 浅田一鳥／豊岡珍平／但見仙鶴 (98才)

与東国一見に向し時江戸小石川の円乗寺へ詣けるに八百やお七とするせし墓あり法号は妙栄信女天和二年壬戌三月廿九日今茲延享元年まで星霜六十三歳になんぬ昔の恋緋桜の緋を紫に潤色し其模様煩多を刪其紋所の簡要を残古きを

種たねとし新あたらしく五まき卷まきに作つく東里くとうりの子産しさんが余風よふうを写うつし潤色じゆんしよく江戸紫と簽げだいし吟唱ぎんしやうに備そなへふしくをこめし竹の葉の散ちりうせず浜はまの真砂まごこのかずくつきせぬためしならんかも

為永千蝶述（98ウ）

伝奇新腔製様扮戯末生旦浄扭浄

寓著木梗文像恭武像漂那活手飛

具託絃誦該貫伍齣付了笑楽院本

俺的詞曲者流凌傲之云耳

豊竹越前少掾

大阪心斎橋南四丁目西側正本屋

西澤九左衛門板（99オ）